書　評

マリ＝ジョゼ・ダルベラ＝ステファナッジ
［渡邊淳也訳］『コルシカ語』

（白水社文庫クセジュ、2020 年）

土屋　亮

1. 序

本書は、地理的・歴史的に（2）の言語と関わりの深い（1）の言語について、（3）の言語で論じられたものを東京大学の渡邊淳也氏が日本語に訳された書籍であり、本稿は、それについて、（4）の言語を専門にする評者が評しようというものである。むろん、（1）がコルシカ語である。

（1）Noi simu studienti.
（2）Noi siamo studenti.
（3）Nous sommes étudiants.
（4）Nosotros somos estudiantes.

本書はマリ＝ジョゼ・ダルベラ＝ステファナッジ（Marie-José Dalbera-Stefanaggi）が 2002 年に出版した *La langue corse*, Collection *Que sais-je?*, PUF. の、渡邊氏による日本語訳である。評者の専門は（4）の言語であり、（1）から（3）の言語はお世辞にもできるとは言えないが、光栄なことに出版前の氏の訳稿を読む機会を得た経緯から、このたび本誌にて書評を書かせていただくことになった。なお、上記の（2）はイタリア語、（3）はフランス語、（4）はスペイン語である。

2. 本書の著者と訳者

本書の著者マリ＝ジョゼ・ダルベラ＝ステファナッジは元コルシカ大学教授で、自身も 1947 年にコルシカ島のアヤッチュ（Aiacciu）で生を受けたロマンス語学者である。これまで数々のコルシカ語研究を率い、出版してきた。1978 年の *Langue corse -une approche linguistique-*（Éditions Klincksieck）、1995 年の *Nouvel atlas linguistique et ethnographique de la Corse*、2007 年に同書の改訂版 *Nouvel atlas linguistique et ethnographique de la Corse* : Volume 1 が、2008 年と 2009 年には同書の 2 巻目 Le lexique de la mer と 3 巻目 Flore et faune（いずれも Comité des travaux historiques et scientifiques - CTHS）がそれぞれ出版されるなど、数多くの著作がある一方で、Kawaguchi et al.（eds.）（2007）にも “From the linguistic atlas to the database, and *vice versa*: The Corsican example” という論考を寄稿しており、日本のフランス語・スペイン語研究者とも無縁ではない。また、訳者

の渡邊淳也氏はフランス語における証拠性、時制、叙法の研究を専門とする一方で、コルシカ語の記述研究も行い、本誌にも掲載されている論文（渡邊 2020）の他、2017 年には『コルシカ語基本文法』（早美出版社）を出版しており、本書を日本語に翻訳するのに氏以上の適任者は、本邦にはいない。

3. 本書の構成と特徴

本書の章立てを以下で確認しておこう。

序章　言語か、方言か
第 1 章　イタリア・ロマンス語圏への編入―時代区分
　Ⅰ．ラテン語以前　Ⅱ．コルシカのローマ化　Ⅲ．トスカーナ化
　Ⅳ．ジェノヴァの存在　Ⅴ．フランスの存在
第 2 章　社会言語学的側面
　Ⅰ．コルシカ語対イタリア語、コルシカ語対フランス語　Ⅱ．書きことばへの接近
　Ⅲ．変種の取り扱い
第 3 章　言語的特徴
　Ⅰ．音声学・音韻論　Ⅱ．音韻論と形態論のインターフェイス
　Ⅲ．話しことばから書きことばへ―コルシカ語の子音体系の綴り字への転記の体系
　Ⅳ．形態論　Ⅴ．統辞論　Ⅵ．語彙論
第 4 章　方言区分の基礎
　Ⅰ．チスモンテ・プモンテの区分　Ⅱ．データの更新　Ⅲ．強勢母音体系という基準
第 5 章　諸方言圏
　Ⅰ．コルシカ・ガッルーラ方言圏　Ⅱ．ターラヴ方言圏　Ⅲ．中央・北部方言圏
　Ⅳ．コルシカ岬半島方言圏
第 6 章　層位化―子音弱化の現象
　付録　ブニファーツィウ―ジェノヴァ方言の孤島
　展望

本書は、この章立てからもある程度うかがい知れるように、コルシカが置かれている地理的な条件、ローマ化された歴史、コルシカ島内外の方言及びイタリア諸方言との関係、現在フランス領であることからフランス語から受ける影響、また、その音韻的・語彙的特徴がまんべんなく描かれている。評者も本書で初めて知ることばかりであった。一方で、形態論や統辞論の節は設けられているものの、個別の文法項目を具体的に取り上げて説明するといった統語論的・意味論的な説明にあまり比重は置かれておらず、本書によって、たとえば、現代イタリア語と比べながらコルシカ語の初級文法を知るというような読者の要請に応じることはできない。実際、「序」で提示した（1）のような例文を作文するには、残念ながら役に立たない。主格人称代名詞も分からなければ、動詞の活用表も載っていない。（1）の文は、コルシカ語の辞書である Culioli et al.（2010）と渡邊（2017）を利用して作成した。そのような意味において、同じ白水社の「（ニュー）エクスプレス」シリーズから『エクスプレス・コルシカ語』が出版されることが望まれる。

また、著者の業績の中でも、前節でふれた2000年代後半の *Nouvel atlas linguistique et ethnographique de la Corse* が大きな存在感を放つが、本書は2002年に出版されたものであり、著者の最新の研究成果の凝縮とは言い切れない。しかし、本書はコルシカ語の諸相およびその各地域の諸方言を、歴史的・地理的観点から捉え、全体像の理解に読者を導くものであり、その目的は完全に達成されていると言える。

4. 本書の内容

本書の第1章および第2章をもとにコルシカの歴史を概観しておくと、コルシカ島は第一次ポエニ戦争後にサルディーニャと共にローマによって征服されたが、ローマ帝国が滅んだ後、ヴァンダル人、ゴート人によって占領される。その後、11世紀から13世紀にかけて、ピサの影響・覇権下に入り、これの影響を大きく受けることになるが、これと平行して、1196年、ジェノヴァによってブニファーツィウ（Bunifaziu）の町が造られ、やがて、1284年にピサがジェノヴァに敗れ、後者の支配下に移行する。そして、現在にいたるフランス領となるのは1769年であり、「フランス化」が本格化するのは19世紀の中ごろからである。フランス国内の地域語（langue régionale）という観点からコルシカ語を見るならば、20世紀後半以降の足跡をたどる必要があるが、これについては後述する。

さて、コルシカ語には標準が存在せず、北部と南部、また、イタリア半島から見てチスモンテ（脊梁山脈の手前側）とプモンテ（脊梁山脈の奥側）と呼ばれる地理的な条件による方言差が著しく、コルシカ語を記述するにはこの差異を捕捉するのが肝要であり、本書の第4章以降は、この記述に充てられている。音韻面の差異では、たとえば「定冠詞＋足」を表す u pede は、南部では［u pˈedi］だが、北部では［u bˈeδɛ］や［u bˈeɛ］のように発音され、母音間における子音の弱化が目立つ（p.68）。また、同じ子音に関して言えば、南部には /b/ と /v/ の対立がある一方で、北部ではこれが失われるという差異も見られる（p.69）。このほか、語彙に関しても、たとえば「犬」を表す語が、南部では ghjacaru と言うのに対して、北部では cane となるような違いがある（p.70）。著者が引用するファルクッチ（Falcucci 1915）以降、従来、南部についてはあまりに大雑把な理解であったというが、この地理的な観点から島内におけるコルシカ語の地域差を検討するやり方は、ファルクッチと同時代のジリエロン＆エドモン『フランス言語地図コルシカ版』（1914-1915）やボッティリオーニ『イタリア版コルシカ言語・民族地図』（1933-1952）、著者の『新コルシカ言語地図』（1995-1999）などを通じて、資料が更新され徐々に精緻化されてきたという（第4章）。このような地理言語学の進展により、島の北部の方言はイタリア半島トスカーナ方言と、島の南部はサルディーニャ島、そして、カンピダーノ、シチーリアの諸方言へとつながっていることが明らかになる。それゆえ、コルシカ語の方言区分を仔細に検討するならば、島内の境界のみならず、海を跨いだトスカーナ地方やサルディーニャ島の上に、境界線を引く必要があり、それが第5章で検討される。第5章の各節は南から北上する順番で記述され、「Ⅰ．コルシカ・ガッルーラ方言圏」はコルシカ島南部とサルディーニャ島北部のガッルーラ地方を一つの方言圏として扱い、「Ⅱ．ターラヴ方言圏」、「Ⅲ．中央・北部方言圏」と北上し、「Ⅳ．コルシカ岬半島方言圏」でコルシカ島の北端を扱う。歴史的に興味深い点としては、コルシカ島はピサからの植民の後、ジェノヴァに統治されたが、言語上のジェノヴァからの影響はコ

ルシカ島最南部のブニファーツィウを除けば非常に限定的で、むしろピサの、それも現代イタリア語につながる中央トスカーナではなく、中世の周縁部のトスカーナの特徴が、コルシカ語のあらゆる位相によく現れているということであり、子音の弱化という特徴に着目すると、島の南部に北方的要素が見られるという特徴を呈するということが指摘できる（pp.14−17、p.130）。

このように、地理的・歴史的に種々の異なる層が重なることで成り立ち、島内および島外に変種を保ち続けるコルシカ語という舞台の上に、比較的新しく現れた演者がフランス語である。フランス（語）のコルシカ語への社会的な影響については第 1 章から第 2 章にかけて（pp.17-21）論じられているが、ここ 250 年ほどの言語学的な影響については、語彙の面についてふれられているのみである（p.61）。また、現代のコルシカ語の地位について、本書には詳らかには書かれていないが、20 世紀に入り、1974 年にはフランスの「地域語」となって学校教育での使用が認められ、1982 年にはコルシカ大学が開学する。このような事象は少数話者言語の保護の観点から肯定的に捉えられようが、フランス国内の、ブレイス語、オック語、バスク語といった他の「地域語」同様、それぞれが各々の地方で教育上の言語となっているものの、公用語としての地位は依然として与えられず、引き続き注視を怠ることができない状況にある（Adrey 2009、大場 2010、渡邊氏の本書「訳者あとがき」参照）。コルシカ語を論じる際は、このような社会言語学上の現状も考慮に入れる必要があろう。

5. 結び

本書の提示する視点・資料は、コルシカ語を、イタリア半島、サルディーニャ島を含めたイタリア諸方言と地理的・歴史的な側面から関連付け、現在も保たれているこの言語の地域的変異のありさまを描こうとしており、重要である。また、先にふれたように、現在フランス領であるという事実を社会言語学的に検討する上においても示唆に富む。従来、コルシカ島の歴史や政治的な状況について日本語で読むことが可能な文献は、レヌッチ（1999）、長谷川（2002）などいくつか存在したが、コルシカ語そのものについては、菅田（2014）、渡邊（2017）、そして本書と近年になって出そろいつつある。また、渡邊氏によるウェブ上での「布教活動」も相まって、評者のような門外漢もコルシカ語にアクセスしやすい環境となった。ともあれ、訳者渡邊氏による本書の「あとがき」が大変簡潔な「コルシカ語入門」となっているので、本書の本文に取りかかる前にぜひとも一読をすすめたい。

参考文献

Adrey, Jean-Bernard（2009）*Discourse and Struggle in Minority Language Policy Formation-Corsican Language Policy in the EU Context of Governance-*, Palgrave Macmillan, London.

Culioli, Antoine Louis, Gabriel Xavier Culioli, Ghjuvan Battistu Paoli et Ghjuvan Micheli Weber（2010）*u Minò -Petit dictionaire Français-Corse/Corsu-Francese-*, Éditions DCL, Ajaccio.

長谷川秀樹（2002）『コルシカの形成と変容―共和主義フランスから多元主義ヨーロッパへ』三元社、東京。

Kawaguchi, Yuji, Toshihiro Takagaki, Nobuo Tomimori and Yoichiro Tsuruga（eds.）（2007）*Corpus-Based Perspectives in Linguistics*, John Benjamins, Amsterdam.

大場静枝（2010）「フランスの言語政策と地域語教育運動－ブレイス語を事例として－」『プロジェクト研究』5 号、pp.1-13、早稲田大学総合研究機構。
レヌッチ，ジャニーヌ（Renucci, Janine）［長谷川秀樹・渥美史訳］（1999）『コルシカ島』文庫クセジュ、白水社、東京。
菅田茂昭（2014）『コルシカ語基礎語彙集』大学書林、東京。
渡邊淳也（2017）『コルシカ語基本文法』早美出版社、東京。
渡邊淳也（2020）「コルシカ語方言学の諸問題」『言語・情報・テクスト』Vol. 27、pp. 117-130、東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学専攻。